

丸の内パークビルディング

設計:三菱地所設計

織りなす丸の内の歴史

「広がり」と「深まり」へ

山極裕史 | Hirofumi Yamagiwa

高田慎也 | Shinya Takada

建築全体の設計意図

本プロジェクトは都市再生特別地区の指定を受け、オフィス約158,000m²、商業約18,000m²、美術館約6,000m²からなる大規模複合施設である。

三菱一号館は忠実な復元を目指し、原位置に独立して建設し、用途はエリアの文化交流拠点となる美術館とした。

タワー棟、アネックス棟は三菱一号館との調和を図りつつも新しいデザインとしている。また、これら建築物の間には来街者の憩いの広場となるべく一号館広場として中庭を創出している。

街区全体は環境共生への積極的な取り組みを行っており、各設備機器の高効率化とともに太陽光発電(60kw)、超高効率化照明器具、エアフローウィンドシステムの採用



DESIGN + TECHNIQUE
BEST EQUIPMENT

Marunouchi Park Building



など、先端的な技術を導入している。中庭のみならず外壁、屋上にも緑化を施し、約2,500㎡の緑化面積を確保した。また、舗装部分への雨水の再利用による給水型保水性舗装の設置や緑化柱へのドライミストの採用により、ヒートアイランド現象の緩和にも寄与する計画としている。

街区は中庭を経由する地上歩行者ネットワークを形成。また地下では、JR東京駅京葉線コンコースと明治安田生命ビルを接続することにより、東京駅と日比谷通り下の地下鉄コンコースを結ぶ地下歩行者ネットワークを形成している。

オフィス基準階は丸の内最大級となる1,000坪超(約3,600㎡)の無柱の執務空間を実現している。天井高は2.85m、OAフロア150mm、奥行き約20mを確保している。階別主要用途構成は、タワー棟の地下2、3階が駐車場、地下1-地上3階が飲食ならびに物販店舗、4階がフィットネスクラブ、5、6、8-34階が賃貸オフィスとなっている。アネックス棟の1、2階は飲食ならびに物販店舗、三菱一号館(復元建築)の地下1-地上3階が美術館となっている。事務所、店舗、美術館のそれぞれのエリアを明快に区分し、セキュリティを確保している。

タワー棟低層外部(商業ゾーン)、「陶」の試み

一号館広場および仲通りに面した低層商業ゾーンの外壁は、オフィスワーカーやショッピングをする人など、街を行き交う人々からの視線が最も集中する部分であるため、建物の豊かな表情を演出するファサードとすることを心がけた。タワー棟基壇低層部の柱の表情は、最下部を花崗岩、中層部を大型陶板で作り込み、一部アネックス棟柱間は、給気ガラーのため、テラコッタルーバーを用いた。

今回、大型陶板およびテラコッタルーバーを用いる際、やきものの良さを表現することを重視した。均一な色味となることを避け、許容する範囲であえてタイル単体、および面全体の中での色ムラを求め、また、タイルエッジ部は濃く焼けた表情とすることにより、全体を通して人の手の作り込みを感じさせ、やきものの本来の表情を追求した。大型陶板のテクスチャは、横リブ形状を施し、色とともに光の陰影により、一日を通しての表情の変化が生まれるよう配慮した。納まりではタイル間は合決り形状とし、目地自体を感じさせず、タイルサイズによらない面の構成の表現とした。

タワー棟内部(オフィスゾーン)、「陶」の試み

オフィスエントランスおよびエレベータホールでは、三菱一号館のレンガを想起させる朱色をテーマカラーとしたテラコッタタイルを採用し、1、2階および地下周りのお出迎いの空間を演出している。基準階エレベータホールでは、同じ型ながらも土の色を変え、一部施釉した白いテラコッタタイルによる明るい空間を用意し、執務空間への導入および変化を印象づけることをねらいとしている。

低層部外壁の大型陶板と同じくタイル間は合決り形状とし、壁面をタイルサイズによらない面で構成し、色味も許容する範囲で色ムラを求めた。空間の中で視線に近い部分に配するため、タイルリブ底にもさらに細かなリブ形状を施し、影の中にもさらなる陰影の表情をつけている。

エントランスロビーおよびエレベータホールは、一日を通して幾つかのライティングシーンの演出を行う。壁面のテラコッタタイルの表情を全面に出した夜間のシーンにおいて、タイル間の納まりが目立たず、タイル自体の反

りが極力でないように、窓の中の配置、タイルの置き方など細かく配慮し、精度を厳しく管理していただいた。

エントランスロビーおよびエレベータホールを主の空間として華やかに演出し、通過する廊下、エレベータカゴ内部は、従の空間として主を引き立てるためシンプルな黒色系の素材(テラコッタ、石、化粧シート)でまとめ、オフィス全体を通して空間の緩急をつけ、光天井、光壁といった光の連続によりエレベータホールへと利用者を導く計画としている。この黒色系の部分のテラコッタタイルは、落ち着きや深みを感じさせる瓦のような渋めの墨色とし、長手方向のリブ形状に反りが出ないように配慮し焼き上げていただいた。

店舗階の水まわり空間の設計について

店舗ゾーン「丸の内ブリックスクエア」は「丸の内コンフォート」、「タイムレスコンフォート」、「ユニークコンフォート」といった3つのコンフォートを軸に、「賑わいと安らぎ」が調和した商業集積として計画を行っている。共用部のデザインは、三菱一号館に呼応した「洋館」をモチーフとし、各階のデザインは、「洋館のプラザ」、「洋館のグランドホール」、「洋館のリビング」、「洋館のスタディールーム」といったテーマを展開している。店舗ゾーンのトイレは、それら空間テーマを受けかたちでモザイクタイルや漆喰で表情づくりを行い、衛生陶器などもデザイン上の統一感のあるものを選定している。トイレブース内の空間寸法についても、便器位置、手摺位置からペーパーフォルダ位置に至るまで、直近の同規模類似大型ビルの事例を検証の上、決定し、衛生陶器は節水など省エネタイプとしている。多目的トイレは、すべてオストメイト対応をし、バリアフリーへの配慮を行っている。

やまざわひろふみ 三菱地所設計建築設計一部副部長 / 1961年生まれ。1984年、武蔵工業大学(現・東京都大学)工学部建築学科卒業。1986年、東京藝術大学大学院美術研究科建築専攻修了。同年、三菱地所(現・三菱地所設計)入社。1990-91年、James Stirling and Michael Wilford事務所。主な作品:丸の内ビルディング[2001]など。
たかたしんや 三菱地所設計建築設計一部主事 / 1972年生まれ。1998年、早稲田大学理工学研究科修了。同年、三菱地所(現・三菱地所設計)入社。2004-05年、上海華東建築設計研究院公司。主な作品:有楽町イシア[2007]など。



1 仲通りから丸の内ブリックスクエアを見る | 2 一号館広場からタワー棟を見上げる
3 丸の内パークビルディング全景 | 4 三菱一号館外観
5 馬場先通りから見る:手前はアネックス棟、奥は三菱一号館 | 6 2階オフィスエレベータホール
7 1階オフィスエントランスロビー:壁面のテラコッタタイルと対の受付カウンター
8 オフィス基準階エレベータホール | 9 1階オフィスエントランスロビー
10 一号館広場からオフィスエントランスを見る | 11 2階オフィスエントランスロビーから見る

